

## アラビア医療異聞（&癌喚捉癌）

平成 24 年 8 月 3 日 平井一郎

（１）アハマドは骨肉腫で、心配した親がドイツまで行って検査を受け診断が確定した。腫瘍で膀胱が圧迫され、尿が出なくなって緊急入院した。が、急性期が過ぎると、ラクダの尿を飲ませる民間療法で治すという。最強硬派の母親は米国の女子大を卒業したばかりの才媛である。クエートの医療では最先端医療に取り囲まれていながら、かえっていろいろな場面で医の倫理について考えさせられた。「患者には最高水準の医療を受ける権利がある」とのことだが、最高水準が「だれのためのどの基準でか？」とは大きな命題である（高橋和江・日本医大助教授は 1977 年～10 年間、クエートの国立病院に勤務）。この記事は、急性期を過ぎると、最先端医療と雖もラクダの尿に勝てないことを示しています。それでも最先端の医療信仰は衰えていません。「自力で生きている」と思っていた私が、今死に直面して、生かされていると知りました。さて、自分が生かされているということは、生かして下さっている者がある筈です。死に際しては、必ず迎えに来て、ラクダに乗せて極楽へ連れて行ってくれる筈です。

（２）癌喚捉癌：癌が、ガン細胞を捕まえてくれと言って逃げること。

術者は、正常細胞を攻撃し全身に癌が転移すること。